

Scenario: 月見

Illust: リョウゲツ

月
村
柚
羽
の
都
市
伝
説

【PDF小説】

「はあ……はあはあ、ユワあ……んんっ……アタシ達がこうして縛られるのって、お姫様が悪い人に捕まってるみたいに見えるかなあ……結構苦しいんだけどね……」

「ふふ……そうだね、んくっ……はあはあ。でも王子様は助けに来てくれないからさ……んんっ、もう少しで……んあっ……解けるから、が、がんばろうヒナ」

私達は、お互い拘束されなんとか脱出しようともがく。

このお話は今より数時間前に遡る。

体験版 PDF 小説

【月村柚羽の都市伝説】

それはある地域の都市伝説。

それはある街の一角存在する廃墟の噂。

いわくそこには物の怪の住まいである。

いわくそこには物の怪によってさらわれた女性が囚われている。

いわくそこには立ち入ってはいけない……。

元川の廃墟へは立ち入ってはいけない。

――――

「ねえねえ……あそこの廃墟にいるっていう怪しいヤツの写真を撮ってやろうよっ……」
友達のヒナ……天乃橋雛（あまのはしひな）は、いつも元気だ。
今日はヒナと街で遊んでいた。

美味しいものを食べたり、お店を回ったり、それはいつも通り楽しい時間だった。

少し疲れたため、手頃なお店でお茶を楽しんでいるとヒナは玩具を見つけた子供のように目を輝かせていた。

彼女の持った携帯端末に映し出されていたのは、とある廃墟の写真。それは私にとってもそれなりに見慣れた物ではあった。

元川集合地区。住宅・商業・工業・公共施設を一定の区画にまとめようとした実験地区。私が物心ついた時には、それはすでに廃墟だった。最近になりようやく再開発の話が出てきたばかりだ。ただ、それと同時期にある噂話も表沙汰になってきた。

いわくそこは物の怪の住まいである……と。

都市伝説にしても安直（チープ）な物である。私は興味の欠片もなかった。

しかし私の愛すべき親友は、この手の話が大好きなようだ。すでに行く気に満ちている。

「ヒナ……本当に行くの。一応あそこ立ち入り禁止区域だよ」

「何言ってるのよ、だからいいんじゃないにねえ行こつ、アタシがいるから怖くないよっ」

「そういう問題じゃないんだよ、ヒナ」

先に席を立ったヒナを追いかけるように、私は残りのキャラクターマキアートを煽り、足取り重く着いていく事になった。

「ルンルンルン♪」

陽気に鼻歌が交じる彼女。

明るい金髪に近い茶色の髪がフワフワと揺れ、腰に巻いたカーディガンも合わせて揺れる。

足元のルーズソックスもヒナの雰囲気ととても合う。人目を引く彼女、いらぬ誤解を受ける事もあるが私は彼女をととても好ましく思う。

「ん、ユワドーかしたの」

「ううん、なんでもないよ」

ユワ……月村 柚羽（つきむら ゆわ）は私の名前。

「へっへっへー、相変わらずユワの制服姿は可愛いですなあー。ベスト可愛いし、ほっそり足にニーソが似合うよ。食べていいよ」

彼女が私に耳に触れた。ビクッと反応してしまう。私は耳に触れられるのが苦手なのだ。

「ちよつとにもうセクハラ禁止だよヒナ。でも、誉めてくれてありがとう」

そんな会話をしながら私達は、町外れの廃墟にたどり着いた。

静まり返った雰囲気、錆びた立入禁止の看板、人気はまったくなかった。

「ふう……なんか水辺の匂いがするね……ねえヒナ、近くに川とかあったっけ……ヒナ」
ピンと空気が張り詰める感覚。

いやそれよりもまずヒナの姿が見えない。予兆があつた訳ではない。そう、気がつくといきなりヒナが消えたようなそんな感覚だ。

私は急激に怖くなった。微かに震える身体が止まらない。

「ヒナ、どこいるの？」

私は辺りを探した。

その時、どこか遠く聞こえる叫び声のような物を認識した。それはヒナの声に聞こえない。
もない。

「まさか……この中に……」

ガラクタのお城のような廃墟。誘い込まれるかのように、私は侵入した。

そこは寂しさや懐かしさを感じた。昔の生活感が残るそこは、伽藍堂（がらんどう）という言葉を思わず使いたくなる。

私は廃墟の城に恐怖を感じながらも奥へ奥へと入り込んでいった。

大きい建物、研究施設と住宅施設が合わさったようなその建物に着いた時、たしかに聞こえた。

「こっちだよ」

私は駆け出した。

その建物の地下一階へ階段付近で見つけたのは、ヒナが愛用しているヘアゴムだった。

「ヒナここにいるの？」

地下一階は薄暗かったが、一番奥の小部屋だけ開いているのがわかる。

私はゆっくりとその部屋へと足を進めた。

「むむううっ」うむむうううむうっ」

「ヒナ」

彼女はそこにいたのだ。何故か柱を背に手を頭の上にした体制で立っている。

近づいてわかった。

彼女は柱に手を回し手錠で繋がれ、足も同様に同じタイプの手錠で拘束されていた。さらに黒い布で目隠しをされ、口には白い布を噛まされ猿轡をされている。

「ヒナ、ヒナ」大丈夫」

手錠は無理だったのでひとまず目隠しと猿轡を外した。

彼女の小さな口からは、たくさんの布切れが見えている。おそらく声を出せないように詰め込まれたのだろう。

私はそれを取り外した。彼女の唾液を含んだそれは、ずっしりと重く、それを見たヒナも申し訳なさそうな顔を浮かべた。

「ぷはっ……はあはあ、ユワー怖かったよお。あっ……あたしの……でた布、唾液いっぱい
で手が汚れちゃったね、ごめんね」

「バカ、そんな事気にしなくてもいいのよ、それよりも……」

手足に鈍く光る手錠は、ヒナにがっちりと装着され、とても無理やり外せるような物ではない。

「手錠ってさ、好きな人の前でプレイとしてなら辛くないけど、今は窮屈だしちょっと怖いよね、アハハハ……」

この状況でも彼女はユーモアを忘れない。しかし猿轡で呼吸がしにくかったのか、顔が紅潮している。笑う顔だが目には涙が。その不安が私の胸にヒシヒシと伝わってくる。

私は彼女をそっと抱きしめた。

「大丈夫だよ、ヒナ。これから手錠を外すための道具探してくるよ、色々残ってたから多分なんとかなると思う」

「うへへーユワあったかい……うん、ありがとう。アタシの命、ユワに預けるよ」

「命って、大袈裟なんだから。じゃあ行ってくるね」

名残惜しかったが早くヒナを助けてあげるため、小部屋を後にする。

「アタシ囚われたお姫様みたいだね」

「私もお姫様がいいな」

「じゃあ、一緒に捕まっちゃう？」

「そうだね、ヒナと一緒になら、縛られても怖くないかもね」

嬉しそうな彼女を笑顔に見送られ私は廃墟探索に戻った。ポソリと呟いた彼女の一言には返事が返せなかったけど……。

「なんか水の匂いが濃いね、雨でも降ったのかなあ……」

研究棟らしき建物。

三階まで見回った時、私はようやく倉庫を見つける事が出来た。中を確認するとそこは、学園の教室くらいのスペースに荷物が散乱している。年月こそ感じられたがまだ使用可能な工具類もあった。

「せめて、手錠の鎖を切れれば……ん」

不意に違和感を覚えた。

ヒナは、拘束されて猿轡までされていた。声を出せないようにされていたのだ。

「私の聞いた『こっちだよ』って何？」

疑問は次々に沸いてくる。

だけどそんな小賢しい推理は、一気に消え去った。

不意に出口に視線を合わせるとそこには、信じたくないモノがいた。

それは筋骨隆々にしてオイルで照りが出てる身体。着ているのはパンツのみ。何故か顔には紙袋をすっぽり被り、眼の部分だけくり抜かれ、手には錆が出ている鉋を持っている。一言で現すならそれは……

「へ、変態ボデイビルダー……」

恐怖にかられ、出口へと走り出したがグイッと左手を捕まれた。手元に引き寄せられた後、口を手で塞がれ身体を押さえつけられた

「んんっ……んんんうっ……」

私はなんとか抜け出そうと身体を必死でバタつかせたが、それを静止するかのようにつく色の鉋が首元に当てられた。

「ううん……」

私の手足からは力が抜け、ダラリと垂れ下がった。

体験版はここまでとなります。

続きは本編にてお楽しみください。

ここまで読んで頂き、ありがとうございました。